大分県杵築市八坂川「八坂かっぱクラブ」の活動と河川環境への理解

綿末　しのぶ[1]・片岡　正子[2]・林　早苗[3]

[1]非会員　八坂かっぱクラブ　実行委員会委員長（〒873-0015 大分県杵築市八坂2943番地31）
E-mail:swatasue@s.email.ne.jp

[2]非会員　八坂かっぱクラブ　実行委員会会計
[3]非会員　八坂かっぱクラブ　実行委員会副実行委員長

大分県杵築市の二級河川八坂川をフィールドとして，「八坂かっぱクラブ」は16年間、地域の子供たちに自然観察会を中心とした環境教育を続けている．河川改修で、河川環境は地域住民と川とのつながりによって守られることを知り，川とのつながりを再構築するために「八坂かっぱクラブ」を設立した。今，子供たちから家族へ，地域住民へと，かつてのように川の資源を暮らしに利用することが広がりつつある．

Key Words :*environmental education, nature observation meetings,river environmente,river improvement,*

1.　杵築市概要

八坂かっぱクラブの活動は，大分県杵築市の二級河川を中心に行っている．杵築市は国東半島の付け根に位置し人口約3万人，面積280平方km，市の中心を全長30km，流域面積87.6平方kmの八坂川が流れ，農業や漁業に豊かな恵みをもたらし守江湾へと注いでいる．

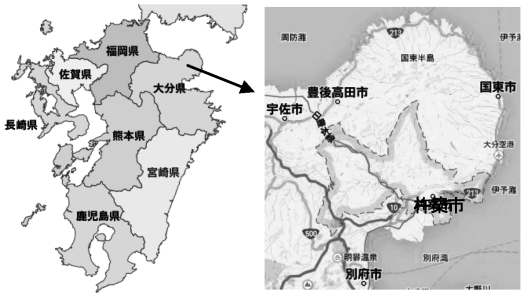

図-1　大分県杵築市位置

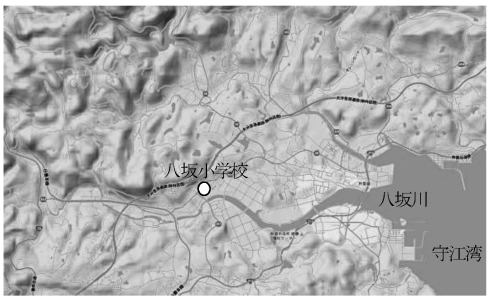

図-2　杵築市八坂川流域図

2.　設立経緯

八坂かっぱクラブは，杵築市の青少年地域活動事業として1991年から1994年まで4年間八坂小学校の4年生から6年生までを対象に，「地域活動を通して郷土理解や環境保護、仲間づくりの涵養を図る」ことを目的に作られた．市の事業であったため1994年で打ち切りとなり，児童，保護者から存続の要望が上がっていた．

1998年3月から再開のための話合いを行い，数回の会議ののち，実行委員会形式の自主活動として，1998年6月21名（在籍数246名）で新たに発足した．今年は35名（在籍数137名）で活動している．なお，会の名前の由来は，八坂川の河童伝説による．

(1) 設立時の時代背景

八坂川は，かつては子供が泳ぎ，鮎やウナギ，スジアオノリなどの獲れる清流で地域の暮らしに密着していたが，1960年代に水質が悪化し，遊泳禁止となり地元住民による川の整備も行われなくなった．夏から秋になると再三洪水を起こす迷惑なだけの川となり，人びとから忘れられてしまった．

1997年9月の台風19号の大洪水により，蛇行部を直線化する河川改修工事の完成時期が早まり，環境影響調査や生き物移植が市民参加で行われることになり，参加した市民は豊かな生態系に驚き，美しい景観に魅了された．1997年の河川法の改正もあり，何とか川の景観を残そう

と署名活動もあったが地方分権と二級河川という状況では難しく，実現にはいたらなかった。

表-1　杵築市における洪水被害の資料

宝永4年（1707年）	8月18～19日	大高潮
享保14年（1729年）	8月19日	大洪水
宝暦12年（1762年）	8月8日	洪水・山潮
文政11年（1828年）	7月2日	大洪水
嘉永5年（1852年）	8月22日	洪水
明治41年（1908年）	9月	大洪水
昭和36年（1961年）	10月25日	大洪水
昭和51年（1976年）	9月10日	洪水
昭和57年（1982年）	8月27日	洪水
平成9年（1997年）	9月16日	洪水

写真-１　河川改修前の八坂川

写真-2　河川改修後の八坂川

⑵ 設立趣旨

河川の環境保全はその地域の住民がいかに川を利用し愛着を持っているかで決まることを経験し，八坂地域で育つ子供たちには川で遊び，川の恵みを食し，愛着を持って河川環境を大切にする心を持ってほしいと願い，当クラブを設立した.

また，地域には古墳，遺跡など歴史的文化遺産も多く，それらを学び，社会に出たときに故郷自慢のできる人に育ってほしいと考えた.

・八坂川をよく知って，楽しく遊ぼう！

・地域の文化，歴史，伝統を学ぼう！

・自分の命は自分で守ろう！

⑶ 設立

子供たちは河川改修に伴う生物移植や遺跡調査にも参加し，生物多様性の重要性や洪水と人々の暮らしの歴史的な営みも学習したが，1998年10月に再び洪水になり，河川改修工事の是非をディベートするという学年もあり，子供たち自身も河川改修について身近に考えることとなった.

会員募集は八坂小学校の3年生から6年生であるが，1～2年でも兄弟姉妹がいれば加入できることとした．八坂小学校の在籍数はこの15年で約半分になったが，会員が減ることはなく，地元の川で遊び，学ぶ楽しさを体験できる活動は，児童，保護者の高い支持を得ていることがうかがえる．（図-3）

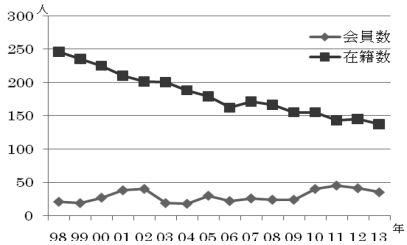

図-3 八坂小学校在籍数と会員数の経年変化

3.　運営主体

運営主体は，趣旨に賛同したPTA会員，校長，教頭，社会教育委員会職員で構成される実行委員会であり．PTAの会長，副会長がそのまま実行委員として会の運営にあたったので，当初はPTA活動の一つという認識もあった．子供が卒業しても地域の有志として，実行委員を続けてくれる人もいる.

活動が始まって4年目から地域の公民館活動として，市の社会教育団体に認定された．行政が携わることで担当者の移動により，活動に支障をきたす場合もある.

16年間活動が継続できたのは，様々な人が交代で実行委員になることで活動の理解が広がったことが要因の一つであり，実行委員自身が活動を楽しみ，川に愛着を持ってくれたことがもう一つの要因と思われる.

4.　活動内容

主な活動は夏の「八坂川探検」である．源流の一つ豊の国湧水15選にも選ばれた「水の口」から，日本の重要湿地500に選定された「守江湾（八坂川河口）」干潟までを学ぶ．また水源の鹿鳴越連山の経塚山に登り自生のミヤマキリシマを鑑賞することもある.

講師には，大学研究者，学芸員，地元の郷土史研究家，

漁師など多方面の先生方を迎え，川をめぐるさまざまな体験を学習することができる．

写真-3　経塚山にて設立当時の子供たちと実行委員

(1) 八坂川探検

八坂川は河口や汽水域には干潟，砂浜，葦原，中流域には金鉱山の跡，上流には棚田が広がり，景観や生態系の変化を把握しやすく環境教育の場として良好である．八坂川は生物多様性に富み，子供たちの感性を育んでくれる．

a)　河口域

河口域ではハクセンシオマネキやカブトガニの幼生，ハマグリやウミニナなど多様な底生生物や，ハマボウの花を観察できる．冬にはマガモを始めカモ類，オシドリ，シギ類，サギ類など多くの渡り鳥も観察できる．

写真-4　八坂川河口干潟

写真-5　八坂川河口干潟　カブトガニ幼生

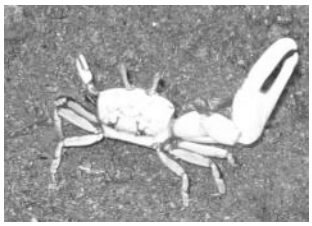

写真-6　八坂川河口干潟　ハクセンシオマネキ

写真-7　八坂川河口干潟　ハマグリ

写真- 8　橋詰公園下　ハマボウ

写真-9　橋詰公園にて　野鳥観察会

b)　汽水域

汽水域のエコトーンではヤマトシジミ，モクズガニ，ハゼ類，ヌマエビなどが生息し，たくさんのウナギ塚を見ることができる．ヤマトシジミ堀り，ウナギ塚体験も子供たちに人気の活動である．

写真-10　八坂橋下流　ウナギ塚体験

写真-11　ウナギ塚のウナギ

写真-12　モクズガニ

写真-13　八坂橋上流　魚の観察会

写真-14　八坂橋上流　ギンブナ

c)　上流域

八坂川探検の一日体験のときは「水の口」で昼食を取る．親水公園の「水の口湧水公園」が作られ，生き物が増え変化していく様子を学べる．カワニナだけだった池はハエが住みサワガニが生息するようになった．夏の暑さの中でも，数分で足の感覚がなくなるほど冷たい湧水公園での水遊びを楽しみにしている．

写真-15　水源水の口　ミヤマカワトンボ

写真-16　水の口湧水公園にて参加者一同

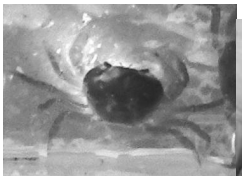

写真-17　水の口 サワガニ　　写真-18　ハエ

⑵ アジア子ども水サミット

2007年12月第1回アジア・太平洋水サミットが大分県別府市で開催され，オープンイベントとして杵築市内で「アジア子ども水サミット」を杵築なぎさの研究会と共催し，中国上海市，愛知県春日井市の子供たちと交流した．黄浦江，庄内川，八坂川それぞれの川の特徴や問題点を提起し、めざす理想の川の姿を話し合い絵に描いた．かっぱクラブの子供たちは他の地域の川の現状を聞き，八坂川の生態系の豊かさに驚き、この河川環境を守っていきたいと感想を述べていた．後日，交流会に参加した子供たちに報告してもらったが，意見，感想，発表の様子など著しい成長が見られた．

写真-19　アジア子ども水サミット参加者一同

写真-20　八坂川河口干潟でのエクスカーション

5. 結論

1997年の洪水を契機にこの会は設立されたが，その時に来杵された専門家の方々に八坂川の専門的な知識を教えていただき，子供たちも八坂川の河川環境を正しく学ぶことができるようになり，河川改修をきっかけに地域住民はかつてのように川に関心を寄せるようになった．

最初は直に触れられずスコップでカニを恐る恐る触っていた子が，帰りには素手でカニを獲っていて，笑顔でカニいっぱいのバケツをみせてくれた．低学年のときにはいたずらばかりしていて，団体行動が苦手だった子が6年になり会長に立候補してくれた．始めの会では「ありがとうございました」が言えなかった会長が終わりの会では立派なあいさつができるようになった．八坂川の自然体験は子供たちを大きく成長させてくれる．

子供たちは家族と川でシジミ堀りをするようになり，家族，親戚，友人たちが川で遊ぶ姿を見かけるようになった．川が憩いの場であり，自然資源を持続的に活用することで，川の恵みを暮らしに活かしていた時代の，川と人のつながりの復活につながる可能性を感じている．

参考文献

1) 大分県土木建築部河川課，大分県土木事務所：カブトガニの棲む干潟，大分県，宇多高明，清野聡子，1999.
2) 八坂かっぱクラブ：八坂川探検，綿末しのぶ，2003.
3) 杵築市誌編集委員会：杵築市誌，杵築市，2005
4) 杵築なぎさの研究会：第 1 回アジア・太平洋水サミット/オープンイベント報告書，釘宮浩三，2008

（2013. 7.31 受付）

THE ACTIVITIES OF THE YASAKA KAPPA CLUB,AND UNDERSTANDINGS OF THE RIVER ENVIRONMENT. YASAKA RIVER, KITSUKI CITY, OITA, JAPAN

Shinobu WATASUE, Masako KATAOKA and Sanae HAYASHI

The Yasaka Kappa Club is continuing environmental education to local children for 15 years with a focus on nature observation events. The main field is Yasaka River, a grade 2 river in Kitsuki city, Oita Japan.

The club was founded in order to rebuild the relationship between the river and the local residents since the river improvement works made known that the river environment was maintained by the relationship.

The activities to utilize the resources of the river for living is spreading to the families and local residents from children.